

沼津市若山牧水記念館

第37号

2006.9.15

編集・発行 沼津市千本郷林1907-11 沼津市千本郷林1907-11
社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 http://web.thn.jp/bokusui/

喜志子への手紙



掲示の手紙は、明治四十五年四月六日に牧水から喜志子に送られたものである。(若山牧水全集 第三卷四八七頁、増進会出版社 東京) 出て、一緒に文学の道を歩こうという勧めだが、

私はあなたをまだ斧を知らず鋤を知らず、人間の足音をすら知らない処女地のやうなかただと思つてゐます。ですからこれからどんなにでも耕作し得らるゝと信じてゐます。私はそれを心ひそかに大に矜つてゐます。どうです、甘んじて私に斧や鋤を入れさせますか、然しもう何と言つても許さない、あなたは私のものであらねばならぬのだ。噫、我が愛する人よ。我が者よ。と熱烈な調子で綴られている。

喜志子は、この手紙の後五月四日に家出、上田市に病む中原静子を訪れた後十日に上京し、牧水と生活することになる。

喜志子は、明治二十一年長野県東筑摩郡広丘村(現在の塩尻市)に、太田清人の四女として生まれた。太田家は数百年続いた旧家で、祖父の代までずっと村の庄屋を勤め、喜志子は祖母の手で厳しく躾られたという。祖母は喜志子が九歳の時に亡くなり、母は病気がちで喜志子の少女期は決して華やかなものではなかった。上の姉三人は早く嫁ぎ、喜志子は希望した女学校にも進めなかったが、文学的環境には恵まれていて、母が歌に親しみ、姉たちも文学を愛し、更に高等小学校の担任の小松秀一が、同村の太田水穂や隣村和田村の窪田空穂らと親交があり、自然に文学への志向を持ったのである。『女子文壇』への投稿から山田邦子(後の今井邦子)と知り合い、その上裁縫教師として勤めていた広丘小学校に島木赤彦が校長として赴任、短歌への関心は一層高まることになる。牧水とは明治四十四年六月、上京して太田水穂の家で出会ったのが最初である。二度目の出会いは、牧水が『牧水歌話』を発行した四十五年の三月、信州旅行の途次のことであった。麻績の駅前の料理屋で牧水を交えて歌会が開かれると聞き、誘われるままに参加したという。喜志子には偶然だったが、牧水は彼女との結婚を私に思つての信州行きであった。太田水穂に彼女との結婚を勧められていたのである。

四月二日、牧水は村井駅に喜志子呼び出し、駅に続く桔梗ヶ原でプロポーズをするのだ。牧水はその夜の手紙に、小夜子との赤裸々な過去を包みなく告白する。ぼろぼろになつて私を助けて欲しいということだったのだろう。喜志子は結局このプロポーズを受けて牧水の下に走るのである。その結婚は、電撃的で無計画で、衝動的で、それでいて牧水・喜志子の出会いに相応しいように感じるのには身顛倒なのである。 (沼津牧水会理事 須永秀生)

さびしさをゆるした牧水

米川千嘉子

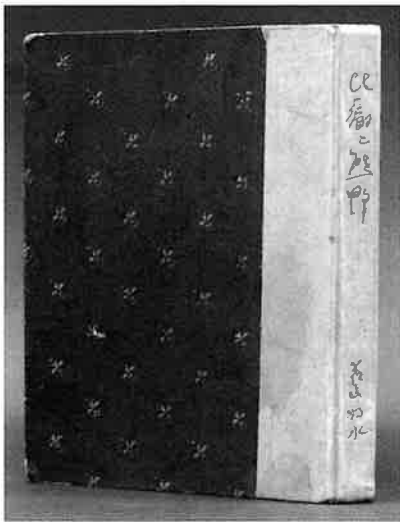
私はまた更なる鳥を聞いた。釣瓶打ちに打つ様な、初め無く終りも無いやるせないその声、光から生れて光の中へ、闇から闇へ消えてゆく様なその声、筒鳥の声である。多くの鳥の中で筒鳥と、郭公と、而して杜鵑と、この三つの鳥はいつからとなく私の心のなかに寂しい巣をくつてゐた。私の心が空虚になる時、私の心が渴く時、彼等は啼いた。私の心がさびしい時、あこがるゝ時、彼らは啼いた。私の心が何かを求めて動く時、疲れて其処に横はる時、彼等は私と同じい心に於て私の心にそのまことの声を投げて呉れた。

大正八年刊行の『比叡と熊野』におさめられた「山上湖へ」という紀行文の一節である。初夏の伊香保からの山路、松林で鳥の声を聞いているこのくだりは、牧水の旅の核心にあつたものを静かなリズムによくにじませている。私はすぐ次の一首を思い出した。

あをばといふ山の鳥啼くはじめ無く終りを知らぬさびしき音なり 『独り歌へる』

明治四二年、二五歳の牧水が多摩川畔の百草

山で詠んだ歌だ。「山上湖へ」はそれから十年後の牧水が、自分にとって旅の原点を語っているような文章で、この時牧水は「あをば」の一首を思いだしていたに違いない。牧水の旅が「ここ」から「むこう」への「あくがれ」であると指摘したのは伊藤一彦だが、「私の心がさびしい時、あくがるる時」と書いているように、「あくがれ」と「さびしさ」は分かちがたく、そんな牧水の心そのものとして鳥は啼いている。数年前、岩波文庫から『新編みなかみ紀行』



(池内紀編) が出て、牧水の紀行文が手軽に読めるようになったのはありがたいことだった。前掲の一節に代表されるような旅する牧水の心情をよく知らせているのも魅力だが、時にそれ以上に新鮮だったのは、そこに描かれた三十代の牧水の旅の現実とそこに出会う人々のことだった。山奥の道を行くべきか否か悩みに悩む牧水、心細さに思わず走りだしてしまう牧水、思いがけぬ目にあつて辟易する牧水が、いかにも人の良さを思わせて率直に語られる。また、旅先で出会う歌友や行きずりの人々、さまざまな生活を背負う人間を観察する視線の的確さ、そこにさびしい人の世を感じる淡淡とした温かさも深く心に残るものだった。若い牧水がおそらくあまり持たなかつたそうした人々への関心は、三十代以降の牧水の旅と旅の歌を特徴づけるものでもあるのに違いない。

小文では、旅の歌を中心に青春期の牧水と壮年期の牧水について少し見てみたいと思う。

あめつちにわが登音のみ満ちわたる夕さま
よひに月見草摘む 『独り歌へる』
あめつちにわが残し行くあしあとのひとつ
づつぞと歌を寂びしむ 『独り歌へる』
旅人は松の根がたに落葉めき身をよこたへ
ぬ秋風の吹く 『路 上』
旅人のからだもいつか海となり五月の雨が
降るよ港に 『死か芸術か』

これら牧水の青春の歌を、透明だ、と思う。

恋に苦しんだこの時期の旅の歌では、さきの「あをば」の歌のほか、天地にみちる鳥の声とこの一、二首目にあるような旅する自身の足跡がくつかえし詠まれているのが印象深い。自分の「あがれ」、「さびしさ」そのものとして啼く鳥の声があり、大天地に小さな足跡だけを残して牧水は歩く。「あくがれ」のまま前へ前へ、小さな足跡を残して歩くことのなかに旅がある、とでもいうように。後半の二首も面白い歌だが、これらもまた青春の透明な歌だ。ある時小さく、ある時大きく自分を自然そのものにしてしまうユニークな感覚は、手ざわりのある身体感覚というよりは、天地に溶解してゆく透明でのびやかな自己イメージが要求するものだろう。

旅する若き牧水はその時何を見ていたか。行く先々で出会う動植物、さまざまな生活を営む人々。少なくとも歌のなかの牧水はそれらに深い関心を示していない。

帰るといふ世にいとほしきことのあり夜更
けてけふもとぼとぼ帰る 『路 上』

街を行きこともなげなる家家のなりはひを
見て瞳おびゆる 『路 上』

われならぬ人居りてけふもわがごとくわび
しきことをして居たりけり 『秋風の歌』

一方、若き牧水にとって、旅から帰るとはつ
まり「世にいとほしきこと」だった。そして、

牧水は「こともなげなる家家のなりはひ」に怯
える。世の人には「こともなげ」にできる生活

が自分にはできないことも、その平凡な生活の
わびしさにも若い牧水の自意識は耐えられない。
当然、旅と日常は対立し、日常の中の自分は「わ
れならぬ人」「わびしきことをして居る人であ
る他なかつた。そんな日常からの疎外感がいつ
そう激しく牧水を旅に向かわせたのでもあろう。



30歳代の牧水の旅姿

崎山の櫓の木がくり芝道に出であひし海女
は藻の匂せり 『溪谷集』

おもはぬに言葉はかけつ面染めてはぢらふ
見れば悔いにけるかも 『溪谷集』

湯を揉むとうたへる唄は病人がいのちをか
けしひとすぢの唄 『山桜の歌』

先生のあたまの禿もたふとけれ此処に死な
むと教ふるならめ 『山桜の歌』

私たちがやっと、三十代の歌の中で、牧水が
旅で出会った人々に会うようになる。青春期の

牧水がさして注目を払うことのなかつた人々だ。
一、二首目、伊豆で海女の少女の健やかさに惹
かれた牧水だが、魅力的な海女の「藻の匂」、あ
るいは声をかけて少女をあわてさせた「悔い」
などもうたう。牧水は少女の生活のさびしさの
ようなものを、簡潔に、しかし確かに感じてい
るのだ。三首目では、草津温泉で病を治すため
に熱い湯を揉んでは何度も湯につかる湯治の
人々を詠む。四首目は、山奥の小さな村の小学
校で二十人ほどの子供たちに年取った先生が裸
足で体操を教えるのを見ての歌。故郷を捨てた
牧水は「此処に死ぬ」ということの真つ当さと
さびしさを身にしみて知っているのであり、そ
れは禿あたまの先生の人生の真つ当さとそのさ
びしさそのものでもあるだろう。

旅する三十代の牧水は、自然の中に人生の気
配を細やかに感じている。旅の時空で牧水のさ
びしさとそこに会おう人々の人生のさびしさが
温かく混じるようなこうした淡彩の味わいは、
壮年の牧水の歌の大きな魅力にちがいない。

瀬瀬走るやまめうぐひのうろくづの美しき
春の山ざくら花 『山桜の歌』

枯れし葉とおもふもみぢのふくみたるこの
紅るをなにと申さむ 『山桜の歌』

枯るる木にわく虫けらをついばむときつ
きは啼く此処の林に 『山桜の歌』

さかり来てきけばさびしききつづきの啼く
音はつづく枯木が原に 『山桜の歌』

そして、旅に出会う自然や生き物たちの営みが切実でかけがえのないものとして丁寧に見つめられているのもこの時期の牧水の特徴だ。自然は自身の心の反映としてのみ存在するのではない。一首目はよく知られた山桜の歌だが、たとえばこの歌を魅力的にしているのは何だろうか。「やまめうぐひ」が温んだ水に勢いをまして瀬を泳ぎ走る、そんな春の喜びに立ち会っている感動がこの歌の美しさを支えている。二首目の牧水は、しみじみともみじ葉を見つめ、木のいのちの色の美しさと不思議に打たれている。

「なにと申さむ」の語調は温かて人なつこい。

三、四首目は啄木鳥の歌だが、牧水は声の主が一心に虫をついばんでいるのを知っている。そんな営みのかげがえのなさをかみしめながら、その「さびしき」音を聞いている。若き日のようになお牧水はさびしい。しかし、そのさびしさはけつして同じではない。

散りたまる柘榴の花のくれなるをわけてあ

そべり子蟹がふたつ

『山桜の歌』

ゆきあひてけはひをかしく立ち向ひやがて
別れてゆく子蟹かな

『山桜の歌』

先に述べたような旅の歌の変化とともに、これら蟹や魚や犬の歌など小動物の歌が増えているのも、三十代以降の特徴だろう。ほかに蟹をしばしば詠んだ牧水は、この小さな生き物のどこか人間的な動きの可笑しさに惹かれたのだから。旅先で見た蟹も、家の近くの浜や沢で会っ

た蟹もある。ここにあげた二首目なども特別の秀歌ではないが、真剣で滑稽で愛すべきもの、これが生き物であり人間なのだ、と牧水が語っているようにも思われる。それは、牧水が生涯抱えていた生のさびしさへのゆるしであるのかもしれない。生へのこうした視点を見いだした牧水の旅と日常は、若き日のような鋭い対立を見せない。旅も日常も、そこで出会ったそれぞれのものたちも区別される必要はなく、よきものとして丁寧に温かく肯定されている。

見つめてなにか親しとおもひしかころげ
落ちたり冬照る庭に

『くろ土』

おのが生のころほそさをかきあつめひそ
かに夢は見えて来にけむ

『くろ土』

鉄瓶を二つ炉に置き心やすしひとつお茶の
湯ひとつ爛の湯

『黒松』

留守居する子等うちつどひたうべむむその
桃の実を父もたぶるよ

『黒松』

三十代後半の牧水は日常を多くうたうようになる。その訥々としてしかものびやかな世界は、むやみに「なりはひ」におびえることはない。知った人のものである。一首目は庭を見ていて縁側から転げ落ちたというのだが、自分を見つめる微苦笑は先の蟹の動きのおかしみを見るのとよく似ている。そして、二首目のようになお「おのが生のころほそさ」を牧水は手放すことができないが、それを相対化する余裕が生まれていて歌の調子を緩やかにしている。三首目には

日常に穏やかな場を与えられた酒の表情があり、ユーモアが楽しい。四首目は旅の途中で体調をこわし別府温泉に逗留中の歌。牧水の柔らかな父性、若き日から「生のころほそさ」を持つづけた人の独特の父性がこの桃の歌に見える。青春の陶酔や衝動力とは違う壮年の牧水の世界。自己のさびしさと世のさびしさをゆるした温かな世界。人生の推移の味わいをも、牧水はたつぷりと味あわせてくれるのである。

「筆者プロフィール」よねかわちかこ



一九五九年
千葉県野田市
生れ。早稲田
大学第一文学
部日本文学科
卒業。大学在
学中に短歌を
始め、歌誌「か
りん」に入会。

八五年歌集『夏樫の素描』で第三一回角川短歌賞、歌集『夏空の権』で第三三回現代歌人協会賞、歌集『一夏』で第四回河野愛子賞、第五歌集『滝と流星』で第九回若山牧水賞を受賞。ほかに歌集『たましひに着る服なくて』、『一葉の井戸』、歌書に『四季のことは一〇〇話』。茨城県在住。今春の第一八回「雛の歌会」の講師。